

以下の問題文は、ノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センがアイデンティティについて論じたものです。この文章につづけて、センは、「アイデンティティにもとづく考えが、これほど残酷な目的に悪用されるのであれば、解決策をどこに見いだせばよいのだろうか?」と問いかけています。この問いに対してあなたはどのように答えますか? 1000字以内で述べなさい。

問題文

アフリカ系アメリカ人の作家ラングストン・ヒューズは、一九四〇年に書かれた自伝『大海』のなかで、ニューヨークを発つてアフリカへ向かったときに味わった心の昂揚を描いている。それまでアメリカで読んできた本を海中に投じると、「まるで心のなかから一〇〇万個の煉瓦を投げ捨てたようだった」。なにしろ、「黒人の母なる大地、アフリカー!」へ向かう途上なのだ。もうまもなく、「ただ書物のなかで読むだけでなく、手で触れ、目で見ることのできる本物」を体験できるだろう、と彼は書いた。同一性の共有意識は、単に誇りや喜びの源となるだけでなく、力や自信の源にもなる。アイデンティティという考えが、汝の隣人を愛せといったお決まりのうたい文句から社会関係資本や共同体主義の自己認識の高尚な理論にいたるまで、幅広くもてはやされていることは驚くに値しない。

だが、アイデンティティは人を殺すこともできる。しかも、容易にである。一つの集団への強い——そして排他的な——帰属意識は往々にして、その他の集団は隔たりのある異なった存在だという感覚をもたう。仲間内の団結心は、集団相互の不和をおおりにやすい。たとえば、ある日突然、われわれはルワンダ人であるだけでなく、厳密にはフツ族なのだ(だから「フツ族を憎んでいる」と教えられたり、本当はただのユーゴスラヴィア人ではなくて、実際にはセルビア人なのだ(だから「ムスリムなど絶対に嫌いだ」と言われたりするのだ。私は一九四〇年代の分離政策と結びついたヒンドゥー・ムスリム間の暴動を経験した子供のころの記憶から、一月にはごく普通の人間だった人びとが、七月には情け容赦ないヒンドゥー教徒と好戦的なイスラム教徒に変貌していった変わり身の速さが忘れられない。殺戮を指揮する者たちに率いられた民衆の手で、何十万もの人びとが殺された。民衆は「わが同胞」のために、それ以外の人びとを殺したのだ。暴力は、テロの達人たちが掲げる好戦的な単一基準のアイデンティティを、だまされやすい人びとに押しつけることによって助長される。

アイデンティティ意識は、ほかの人びと、つまり隣人や同じ地区の住民、同胞、同じ宗教の信者などとの関係を強め、温めるうえで重要な役割を果たす。特定のアイデンティティに関心を向けることによって、われわれは連帯感を高め、お互いに助け合い、自己中心的な営みを超えた活動をすることがなる。近年、ロバート・バットナムらによって精力的に探究された「社会関係資本」に関する研究は、社会集団内の人びとがアイデンティティを共有することによって、内部のあらゆる人の暮らしが改善されることを、たいへん明快に示してきた。そのため、ある集団への帰属意識は資源として、資本のように見なされるようになった。そのような理解は重要だが、アイデンティティ意識は人びとを温かく迎える一方で、別の多くの人びとを拒絶しうるものであることも、あわせて認識しなければならない。住民が本能的に一致団結して、お互いのためにすばらしい活動ができるよう融和したコミュニティが、よそから移り住んできた移民の家の窓には嫌がらせのために煉瓦を投げ込むコミュニティにも同時になりうるのだ。排他性もたらす災難は、包括性もたらす恵みとつねに裏腹なのである。

アイデンティティの衝突によって助長される暴力は、世界各地でますます執拗に繰り返されているようだ。ルワンダやコンゴにおける勢力の均衡状態は変わったかもしれないが、一方の集団がもう一方を標的にする状況は、激しさを増して続いている。スーダンでは人種対立を利用して、イスラム過激主義のアイデンティティをつくりあげたことが、恐ろしく軍国化したこの国の南部で、抑圧された人びとがレイプされ殺戮される事態を生み出した。イスラエルとパレスチナは、いまなお二極化したアイデンティティの猛威を経験し続けており、相手側に憎悪の報復をすべく備えている。アルカイダは、欧米人を標的にする戦闘的イスラム主義のアイデンティティを育み、利用することに大きく依存している。

さらに、自由と民主主義の旗印のもとに派兵されたアメリカやイギリスの兵士の一部が、非人道的な方法で捕虜を「軟化」させる活動をしていたという報告も、アブグレイブ刑務所などから続々と入ってきている。敵の戦闘員や悪人と見なされた容疑者の人命に対する無制限の権限が与えられることによって、看守と収容者は対立するアイデンティティ間の硬直した境界線(彼らはわれわれとは異なる種族だ)によって明確に二分化されている。境界線の向こう側にいる人びとのさほど対立しない別の側面、たとえば彼らが同じ人類の仲間であることなどは、総じて黙殺されているようだ。